

【春】

長野県 「木の根明く(きのねあく)」

木の根明くなり草の根も明きにけり

宮坂やよい

山や森の木の根元から雪が消え始める。

雪国では本格的な雪解けが始まる前触れのように、山毛櫟や櫟などの木の根元に積もっていた雪が丸くドーナツ型に溶け始め、地面が現れる。木の導管がこくこくと水を吸い上げ活動を始めているのである。その音が聞こえるようだ。

まだ雪深い早春の森に入る。木の根元だけぼつかりと地面が見える。この出会いは感激だ。私は春浅い日の上高地で、春楡や山毛櫟や小梨の大木の根明きに会っている。奥志賀高原のカヤノ平には見事な山毛櫟の原生林がある。その木の根明く光景は荘厳とでもいいたい。風が鳴り、地が眩く。

北海道や東北では「雪根開き」「根開き」「木の根開き」、北陸や信州では「木の根明く」「根明き」。「木の根明く胎児はなにを見てをるや」(宮坂静生)、「水音の奥に灯火木の根明く」(山本源)。さらに例句はドイツのケルン在住者にもある。「満々とドナウの水や木の根明く」(平林幸枝)。

掲句は、深山の木の根が明き、雪消がはじまるとひきつづいて野の草の根も明くと詠っている。春はたちまち山から里へ及ぶ。対比があざやかな作。作者は諏訪市在住。

宮坂静生著『語りかける季語 ゆるやかな日本』より引用

高知県 「のれそれ」

のれそれや土佐の男の呑みつぶり

山崎葉

土佐でアナゴの幼生を「のれそれ」という。「たちくらげ」とも。大阪では「べらた」と呼ぶ。漁獲は二月から五月にかけて、春の魚である。太平洋沿岸で獲れ、北は茨城県沿岸まで、産地が広い。

幼生とは、ふか孵化した動物が親とは違う形をとって独立した生活をしている場合を指す。例えば、おたまじゃくしは蛙の幼生であるという類。昆虫の場合は幼虫という。

マアナゴ、クロアナゴなどのウナギ目に属する魚類（他にウナギ、ウツボ、ウミヘビなど）は孵化した後、海中に柳の葉のような形をして遊泳している。これを葉形仔魚（レプトセフアルス）という。体が薄く透けて見える。五センチほどであるが、大きいのは十センチ近いものがある。浮遊生活が終わると親魚と同じく丸みを帯び、体長も短くなる。この「のれそれ」はブリツとした舌触りが好まれ、すじょうゆ酢醤油で食べる。甘味もあり、酒の肴にいい。

掲句は、旬解はいらぬであろう。「のれそれのど越しよろし土佐料理」（住田栄次郎）という句もあるが、のれそれを酒の肴に、土佐っ子はいくらでもいける。豪快な作。作者は高知県出身。

宮坂静生著『ゆたかなる季語 細やかな日本語』より引用

【夏】

神奈川県 「アイスクリームの日」

アイスクリームの日日本丸接岸す 新井みちを

明治二年（一八六九）五月九日、横浜の中心街馬車道通りで、町田房蔵が日本ではじめてアイスクリームを製造販売した。この日を記念して、昭和三十九年（一九六四）、社団法人日本アイスクリーム協会が五月九日を「アイスクリームの日」と定めた。房蔵は、アメリカで酪農技術を学んで明治元年に帰国した出島松蔵から製法を学んでいる。

アイスクリームはローマ時代から上流階級の高級菓子としてあった。後世、イタリアからフランス、イギリスを経由してアメリカに入る。そこで手回し式フリーザーの発明により、庶民階級にまで普及した。万延元年（一八六〇）、幕府の使者としてアメリカでアイスクリームを口にした柳河春三はその日記に「珍しき物あり、氷を色々に染め、物の形を作り、是を出す。味は至つて甘く、口中に入るるに忽ち解けて、誠に美味なり。是をアイスクリンといふ」（「柳河日記」）と記した。日本人でアイスクリームをはじめて食べた感想である。掲句は、アイスクリームの日にメリケン波止場、みなとみらい横浜に泊まる練習船日本丸を配した。ここにも文化の窓がある。作者は横浜市在住。

宮坂静生著『ゆたかなる季語 細やかな日本語』より引用

沖縄県 「椰子蟹（やしがい）」

月の径みちゆく椰子蟹に石の音

小熊一人

沖縄の蟹である。大きいのは一キログラム以上もあるという。与論島を北限として熱帯気候の南島に分布する。オカヤドカリ科に属する大ヤドカリであるが、別名オイハギガニという。沖縄本島ではアンマク、石垣島ではマツコンと呼ばれて親しまれている。

昼は岩礁の隙間に身を隠し、夜間に活動する。六月から十月が産卵期で、夜八時から十時ごろに波打ち際で産卵する。蟹の子どもは海洋プランクトンを食べ、しばらく海で暮らす。変態した稚蟹は陸上へ戻って暮らす。成長すると木の実を求めて、夜間、浜辺の阿檀あだんの林などにいる。前脚の鋏に挟まれると人間の指など切られてしまうという。

肉は美味。沖縄県指定の天然記念物になっている。「弓なりに歩む椰子蟹磯あかり」（比嘉朝進）、「椰子蟹の嗅かぎ登る夜の阿旦あだんの実」（安島涼人）と、沖縄人に詠われている。

掲句は、夏の月夜の風物詩。静かな浜の小路を行くと、こつこつこつこつと石に当たるような音がする。椰子蟹が動き廻っている音だ。作者は長く沖縄在住であった。

宮坂静生著『語りかける季語 ゆるやかな日本』より引用

【秋】

東京都 「古書市（こしょいち）」

古書市や羽根叩まづ空を打つ 鳥海むねき

東京の神田神保町界隈は周知の古書店街。およそ百七十軒の古書専門店がある。その神田古書店連盟が主催し、昭和三十五年（一九六〇）以来、十月下旬から十一月三日まで持たれる神田古本まつりが古書市である。

平成十五年（二〇〇三）は回を重ねて四十四回、江戸開府四百年記念と銘打って「青空掘り出し市」が十月二十九日から十一月三日まで、「特選古書即売会」が十一月一日から三日まで開かれた。大空のもと、市は神保町の二ヶ所で立ち、百万冊の古本がバーゲンセールにかけられた。新東京古書会館を会場に開かれた特選古書の即売会には絶版本、稀覯本、珍しい本、さらに貴重な資料などが出され、にぎわった。以上のほかにブックフェスティバルと称した催しもあった。

古本市は全国各地で持たれているが、これだけの市の歴史と規模は晩秋の東京の名物である。

掲句は、古書の埃を払う羽根叩の動きを捉え、おかしみがある。どこか遊び半分のような気配が捉えられている。作者は東京都杉並区在住。

宮坂静生著『語りかける季語 ゆるやかな日本』より引用

長崎県 「おくんち」

空が酔ふ笛の一節ひとふしくんち来る

中尾杏子

おくんちというと、唐人服の担い手十人に支えられた長崎龍踊じやおどりの躍動するさまが目には浮かぶ。銅鑼どらやラツパの囃子、「もってこーい」（早く来い）、「しゃもーやれ」（アンコール）、「よいや」（やった）の掛け声がいい。

本来、旧暦九月九日、重陽ちやうようの節句が「お九日」。「おくにち」が「おくんち」と訛なまったもの。折から秋祭の季節で、九州では祭をおくんちと呼んでいる。発掘しなくても本来名高いのであるが、地貌季語のエキスタっぷりのことばなのであって取り上げた。

祭礼は現在、長崎市諏訪神社が十月七日から九日、佐賀県唐津市唐津神社は十一月二日から四日。おくんちは地から湧き出した地貌の祭である。

長崎おくんちは江戸初期以来三百六十余年続き、異国情緒を堪能させてくれる。龍踊は唐人との関わりの深い市内の籠町・諏訪町・筑後町が奉納する。

掲句は、祭囃子の笛の音に天空がうっとり酔っている。おくんちはそんな自然までも堪能させる祭。作者は長崎市在住。

宮坂静生著『ゆたかなる季語 細やかな日本語』より引用

【冬】

千葉県 「包丁式（ほうちょうしき）」

安房の国包丁祭へ着ぶくれる

伊藤白潮

千葉県安房郡千倉町（現・南房総市）の高家神社は包丁儀式で名高い。日本料理の神様

を祀る。春・秋例祭があり、包丁式は秋に十月十七日（旧神嘗祭）、十一月二十三日（旧新嘗祭）と行われる。包丁式のイベントは後者が中心。包丁祭ともいい、地貌季語に用いられている。

包丁式の神事は全国にあり、その祭が開かれる時期はまちまちである。高野山総持寺で

は四月十八日、石川県羽咋市の気多大社では一月七日、盛岡市の高倍神社では六月十五日、大津市日吉大社への清和四条流式包丁奉納は八月など。

包丁式はもともと、平安時代光孝天皇時代から千百年の伝統がある宮中行事。高家神社は江戸時代、元和六年（一六二〇）に現在地に建立されているが、祭神は料理の神様磐鹿六雁命を祀る。

当日は烏帽子に袴姿の包丁師が包丁と箸を用い、手を触れることなく、鯛・鯉・真魚鰹などを見事に料理し俎に盛り祭神に献上する。儀式は三十分ほどであるが、盛り上がる。境内には使い終えた包丁を供養する包丁塚もある。

掲句は、なにはともあれ包丁祭は見たいとの安房人の祭好きな性根が伺え、面白い。作者は船橋市在住。

宮坂静生著『ゆたかなる季語 細やかな日本語』より引用

島根県 「ぼてぼて茶(ぼてぼてちや)」

残り日や男ばかりのぼてぼて茶 土橋石楠花しやくなげ

出雲地域に伝わる庶民の茶である。富山のぼたぼた茶、沖縄のぶくぶく茶が同様の茶として知られる。

乾燥させた茶の花に番茶をいれ、土瓶で煮立てる。少し冷ましたものを底が深い呉州手

茶碗に注ぎ、大きめの茶筌ちやせんの先に塩をつけ、ふっくらと泡立てる。そのときの音から「ぼ

てぼて茶」と名付けられたとか。おかしみがある。中へ具ぐを入れて茶を掻かき混ぜながら具ごと飲む。

具には煮豆、みじん切りの大根や漬菜、昆布、紫蘇など。ときに赤飯や冷飯が入る。もともと出雲のたたら製鉄職人が仕事の合間に腹をつくる間食だとか、松江藩主松平不昧公ふまいこうが鷹狩の折の小腹作りに始めたとか起源は諸説あり。明治末あたりまでは愛用されていたが、その後衰微。ところが近年ダイエット食品として注目され始めているようだ。乾燥花であるが、茶の花を用いるので冬が多い。

掲句は、残り日が問題。今年もあと数日という数え日のことか。あるいは夕方の残照の意か。武骨な男ばかりが飲むぼてぼて茶におかしみがある。作者は出雲市に在住した。

宮坂静生著『語りかける季語 ゆるやかな日本』より引用